

学生の成長を見る視点の探索

—地域・連携によるプロジェクト型学習の事例—

武田るい子

Perspectives on Learning and Development through Project Based Learning:
- A Case Study of Second Year Seminar -

Ruiko Takeda

本稿の目的は、プロジェクト型学習（複数の状況を横断することによる学習（越境的学習））を捉え、その変化・効果を問うための枠組みを求めて、評価の観点を学生の学び、成長感の振り返りと語りから抽出し仮説的に整理するものである。結論として、学生たちの学びからは知識・スキルの向上、他者関係効果、秩序形成の大きく3つのカテゴリーが抽出できた。補足的に行ったインタビュー調査からは、他者関係の葛藤がもたらすゆらぎや発展を学びと捉えていることが明らかになった。

キーワード：地域連携、プロジェクト型学習、越境的学習、教育効果、学生の成長感

1 はじめに

国際コミュニケーション科では2009年度以降、学外活動を伴うプロジェクト型の卒業研究が増えている。海外研修(韓国と台湾)での調査活動による文化比較研究、学内広報(SJC ニュース)、中心市街地の散策マップ企画・制作、民話紙芝居創作とYoutubeによる発信、観光地での特産品を活用したカフェ・メニュー開発、企業からの依頼に基づく商品開発である。背景には、大学の「産学官連携を通じた直接的な社会貢献」と学生の就業力育成という課題がある。

協働的活動を学習目的遂行のツールとして組織する方法の研究は、授業研究や評価研究分野を双峰として大学教育改善(FD)を進める上で不可欠になっている。しかし、実践報告と学生の変化を評価する研究をどのように俯瞰し、どのように実践の理論化ができるのかを語る研究は少ない。近年実践報告が増加している産学官連携による職業・キャリア教育の促進に足りない研究は何かを考えてきた。プロジェクト学習前後の学生の就業力(社会人基礎力)向上感や意識変化を測る「教育効果研究」は、即事的な評価からシステム改善にフィードバックするために必要なことではあるが、ある程度の蓄積を経てカリキュラム・授業デザイン研究へ、あるいは連携先を含む拡大的学習システム構築研究へと、歩みを進められているだろうか。この問題意識をベースに、本研究では即事的教育効果研究の限界を指摘し、それをどう乗り越えていくのか、どのような研究視点がさらに必要かを卒業研究セミナーの取り組みを例として検討する。

筆者が担当する卒業研究セミナー(以下、ゼミ)では、2012、2013、2014年度の3ヵ年にわたり、地域の魅力、知られざる情報をわかりやすく伝える冊子、リーフレットの制作を半年間のプロジェクトとして実施してきた。詳しくは後述するが、授業内容は①地域活性化に関する文献を読んで事例を検討する、②マーケティングリサーチのフレームワークを使い、SWOT分析、ニーズ調査に基づいたターゲット設定を行う、③既存の冊子を収集し、レイアウトや写真・イラストのインパクト、コピー、デザイン性の比較検討を行う、④インタビュー練習、写真撮影練習を行う、等の準備を経て、企画立

案から編集作業までを学生たちと教員が協働して実践している。学外の団体、企業との連携は、2012年は「街コン実行委員会」（任意団体）への参加に加え、「地元広告会社」のフリーペーパー（13万部発行）の企画ページを受託制作する産学連携を開始した。2013年度はフリーペーパー制作だけだったが、2014年度には、フリーペーパーの継続以外に、「国際協力NPO」の団体紹介パンフレット制作と近隣自治体の観光地の魅力をどのように広報するか提案を行うこと、既存の観光客向けマップの改善・制作を行った。

産学連携先をクライアントと見立てる文脈を導入し、実際に仕事を請け負うことや、大人と一緒に働くという活動で、学校と実社会を往復することによる学生の変化はアンケート調査を行わずとも、日々の会話から見て取ることができた（2012年）。特徴的なことは、複数の文脈（企業・団体）の活動に参加あるいは関与し、相手の活動に貢献することを学習課題としている点である。顧客志向という文脈導入は長田の教育実践から学び、より実社会の文脈を拡大している。これら学外の人たちとの対話を通じた学びは観察されただけで、業務上の注意事項、自分の感性に基づくレイアウト、素材や言葉選びから他者視点を考慮するようになる、慎重な校正作業を行う等の行動変化をもたらしてくれていると実感する。こうした変化を記述しきることはどうていできないが、複数の状況を横断することによる学習（越境的学習）を捉え、その変化・効果を問うための枠組み、方法をどうしたらよいか、私たちが知るべきことは何か、評価の観点を求めて本研究では、ひとまず学生の学びの視点を中心に整理することを目的とする。

2 アウトカム研究の問題

アウトカム研究とは一般に、大学教育全体として数量的にアウトカム指標を設定し、学生に入学時と卒業時点での能力（専門的・汎用的）の差異を質問紙で自己評価させて、それら能力間と大学教育の満足度との相関関係から大学教育の質を評価しようとするものである。I-E-Oモデルと呼ばれる効果研究のフレームワークは、ミシガン大学が長期的な卒業生調査の遂行で採用してきたもので、日本でも大学教育アウトカム研究に援用され一般化しているところだ。葛城（2010）は、「日本では、アウトカムの獲得状況を把握するための指標のあり方に対する考察が十分に行われているとはいえない」（p. 441）が、これからの大学教育は「学士力」の獲得状況の根拠を示す情報を開示することが一層求められていくと述べている。そのためにはアウトカム指標の一般化が必要であり、大量の学生調査を実施しなければならない。こうした数千人規模の学生調査を実施することは、本学のような地方の小規模大学では実施自体が難しい。2011年本学科が参考にした九州の短期大学連盟が協同で同じ質問紙を使い、卒業生に実施した短大教育の評価研究はあるが、入学時と卒業時点で同じ質問紙を使った継続的短大教育の評価研究は今のところ公表されていない。

2011年に実施した卒業生調査の結果を考察した論文において、われわれは量的研究法によるサーベイの限界を次のように整理している。

- 1) 先行する調査項目を参考にした調査設計では、先行研究の分析視点を越えた考察には限界がある。
- 2) 卒業後どの時期に何を評価すれば教育成果が把握できるか、指標のあり方を考える研究の必要性を否定しないが、卒業後の業務で発揮している力を学校での学習の転移として測る方法が確立していないこと、個人の学習過程を追うことの困難がある。
- 3) ギャップアプローチ（学校で獲得した力と実務で必要とされる力の差）による分析では、必要とされる力との差を埋めるべき不足した力と解釈するが、実際の実務の文脈が多様に想定できる

ため、数値の差異の大きさが何を意味するのか質的分析をしなければ改善策が導けない。

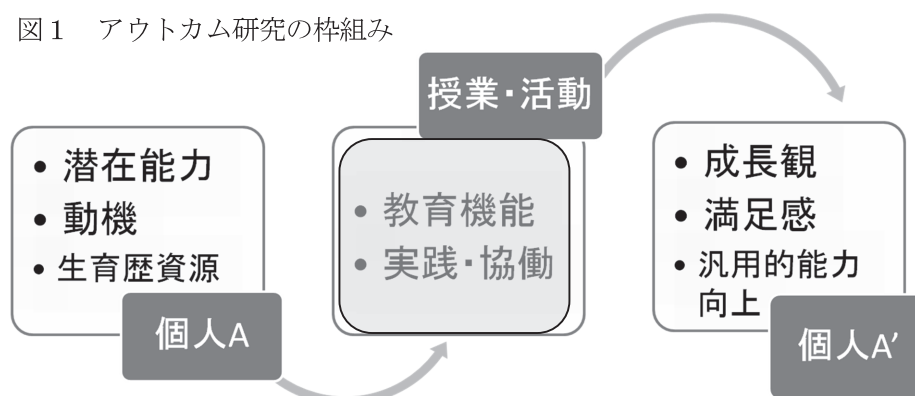
- 4) 教育評価研究の主流アプローチは、キーコンピテンシーを獲得すべき目標と設定しどれだけ近づいたかを評価する方法をとり、それに基づく授業デザインはトップダウンアプローチになる。これからの社会に求められる知識労働への参加を促進するべく、プロジェクト型学習活動で学生と教員が協働するボトムアップアプローチが重要ではないか。

以上の考察に基づき、本学科は2つのことを実践した。一つは、3)の量的調査の限界を補完するために業界・業務別に卒業生を抽出し、業務内容、困難への対応力、短大教育の効用を尋ねる面接調査を実施。二つ目は、授業改善を4)の方向性で取り組むこととし、ビジネスコースの授業において、職業実務的文脈と問題発見解決型アプローチを導入したことである。

同様の問題は、産学官連携、地域連携教育における学習効果研究にも見出すことができる。わが国では2000年代に産学官連携による授業実践事例が増加していく。2005年の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」が「質保証システムの整備」に加え、大学教育の「第三の使命」として「国際協力、公開講座や産学官連携等を通じた、より直接的な」社会貢献を強調したことは、大きな政策的インパクトであった。同時に欧米の大学教育研究を通じて地域課題の解決に貢献するサービス・ラーニングの方法、企業の課題解決などに携わるPBL (Project Based Learning) の方法が紹介され、学生の就業力や汎用能力の向上との相関が示唆されたことから、プロジェクト型学習の効果研究が一つの潮流になっていったと思われる。プロジェクト学習の前後で学生自身に事前項目(大学生生活満足度、学業状況等)に加え社会人基礎力の自己評価を求め、事後評価を行ってその差異を測る方法は、アウトカム研究の枠組みを援用したものである。このような学習効果研究は即時的で授業改善に役立てるためのものである。

では、実践研究が一般化され学習をより効果的にデザインする理論的研究へと発展するためにどのような研究が必要だろうか。アウトカム研究の枠組みではとらえきれない授業活動の内実や過程に生成する教育機能をどうとらえるか、学生の学びや満足度を数値だけでなく質的にプロセス的に捉える研究が必要だと思われる。図式的に表現すると、以下(図1)の効果を生み出す媒介項である授業・活動が見えない、ブラックボックス状態であることがアウトカム研究の問題点である。

図1 アウトカム研究の枠組み



IEO モデルを参考に武田が作成

3 プロジェクト型学習の実践—卒業研究セミナー（2010年～2014年）における授業改善

ここでは、卒業研究セミナーで3年間取り組んだプロジェクト型学習の成果を分析する前段の作業として、授業改善1期（2010～2011）と授業改善2期（2012～2014）に分けて、授業改善の経緯を記

述する。プロジェクト内容は、表1に整理したとおりである。1) 広告会社のフリーペーパーの企画ページを2ページ制作する、2) 地域課題（人口減による商店街衰退のような問題）の解消に向けて、町の魅力を紙メディアで情報発信する、3) イベント実行委員会参加、4) 観光客ニーズ調査と観光プランの提案である。このうち、1)と2)の活動は取材対象を変えながら継続しているもの、3)は単年度で終わったもの、4)は今年度初の試みだったものに区分でき、次年度以降も継続する活動が1)、2)である。この2つの活動は、コース目的に合わせた適切なものと考えられる。

表1 卒業研究セミナーⅠ、Ⅱの展開

年	内容	成果
2010(旧カリの2年生)	1)学内広報室と広告会社と連携して高校生向けオープンキャンパスで配布するノベルティグッズの企画開発、2)学科紹介DVD制作(教員・サークル活動)	マーケティング実践(顧客ニーズ調査)に基づき企画・商品デザイン提案した。広告会社の指導・講義あり
2011(地域情報コース)	NPO法人と連携して街歩きツアー考案、実施(3チームで企画立案、現地調査、交渉・宣伝、ツール作成、接客オペレーション)	社会的責任ある実践を学生主体で実施、大人や商店との交渉が多くあった
2012	1)広告会社のフリーペーパー企画ページの受託制作、2)長野市街地街歩き冊子制作、3)街コン実行委員会スタッフ	1)社会的評価を受ける、大人の地域取材から学ぶことあり、 2)コンセプトのある制作 3)商店主と交流し地域課題を意識した
2013	1)と2)を継続	2回のグループ制作、1回の個人制作、計3回制作したことで、デザイン性の高い作品が完成した。
2014	1)継続、2)飯山スイーツマップ制作 3)首都圏大学生へのニーズ調査と観光プランの提案	制作物だけでなく、地域課題解決にマーケティングロジックを活用して調査、分析、提案を行った。全チーム作業行程表を作成した。

(1) 卒業研究セミナーⅠ、Ⅱの授業改善1期：2010年～2011年

2010年、2011年の2年間は、商品開発と学内広報ツール制作、街歩きツアープランと宣伝ツール制作を試行したが、商品開発に関する知識や旅行プラン策定の方法などは素人の真似事であったため、スキル・知識の学習が不足していた。広告会社の担当者には、ノベルティグッズ商品化のプロセスにおいて、顧客ニーズ調査を行い、商品コンセプトを立てる過程を指導サポートいただき、本学広報室に企画のプレゼンを行った上で、デザインをおこし8月のオープンキャンパスに配布するという工程を体験することができた。しかし、学生たちにはこうしたプロセスを言語化して伝える学習は行えなかった。商品化までの工程が短期間であったことからじっくりプロセスの意味を考えたり、教えたりする時間がなかったことを反省する。つまり、産学連携が実利的なプロダクトにある場合は学習の要素を意識的に織り込まなければ、プロジェクト終了によって学習も完結せざるを得なくなることで学生たちの専門的学びを深めることができないことになる。2012年度はNPO法人と連携して、街歩きツアーを3本企画、宣伝ツールの制作、街歩きツアーのオペレーションも実践するなど盛り沢山となった。ここでも、観光に関する専門的学びが不十分だったことは反省点だが、学生チームがそれぞれに作業工程を理解し、自分たちで計画的にプランづくりの下見調査に何度もでかけたり、訪問先に依頼

交渉を行ったりするなどの活動は実践できていた。プロジェクト管理の意識化を徹底することで大人との交渉ごと、接客（得手不得手はあるが）は短大2年生であれば、アルバイトなどの社会経験もあり任せられることがわかった。これら2年間のプロジェクト型学習からの教訓を以下3点、仮説的に整理した。

- ① 連携先と実利的な活動をする場合に、学習目的を良いプロダクトに置くことの確認合意とともに、学生は専門的学習を事前に行い体験後に振り返りを実施すること、この振り返りを連携先企業、団体の人達と共に行うことが望ましい。
- ② プロジェクトマネジメントの工程管理法を学び、実践を管理しながらチーム行動を励ますことが学生の自律性を高めることにつながる。
- ③ 専門的知識、スキルは必要に応じて事前に学ぶが、活動に参加しながら必要に即して学ぶ方法のほうが自主的学習に発展しやすく、プロダクトの質への欲求がスキル学習を真剣なものに高める。

（2）卒業研究セミナーⅠ、Ⅱの授業改善2期：2012年～2014年（学生の学び評価を実施）

2年間の試行錯誤を経た授業改善は活動内容の選定に具現化しているが、上記3点を次のように改善した。①地域連携先との目的設定、学習支援内容を双方に負荷がかかりすぎない活動に限定したこと、②のプロジェクトマネジメントを学生たちに意識づけること、③イラストレータのスキル、編集・印刷工程に必要な知識は制作活動を通して学ぶこととするが、イラストレータの基礎は別の授業「グラフィック基礎演習」で各自学習することを伝えている。

2012年には2010年にノベルティグッズを開発した広告会社が発行するフリーペーパーの企画ページを担当する話がまとまり、ゼミ開始前の企画会議、取材活動への同行、記事の書き方指導などで連携を開始し、本年度で3回実施することができた。また、2012年は長野市初の街コン（ナガコン）開催につきボランティア実行委員会への学生参加依頼があり、地域活性化イベントへも参加した。20～30代の社会人ボランティアたちが中心だったことから学生たちも人間関係に溶け込んで、名簿やブログ管理など任された仕事で貢献することができたということだ。

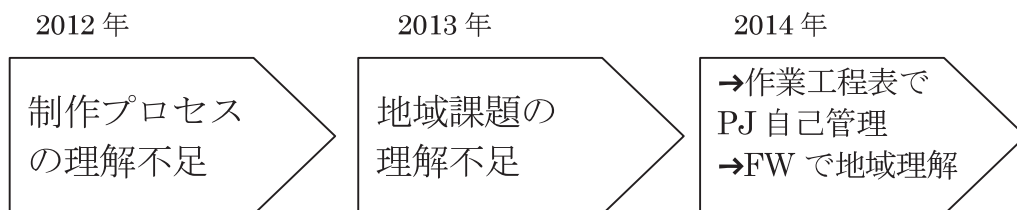
この活動を通じた学びは、商店経営者との交流から市街地商店街の衰退を目の当たりにしたことだ。地域の課題を実際に地元商店街の方々の会話を通じて理解することになったのは、副次的成果であった。この年に制作した「Yorimichi」（寄り道）はこうした問題意識を共有していたため、若者をターゲットに市街地のお店やカフェに出かけてもらうというコンセプトで制作された。しかし、イラストレータスキルの事前学習が不十分だったため、制作過程で過大な試行錯誤があり制作物の質も総じて低いものだった。制作過程の反省として、学生たちがお店取材交渉をする際にもどのようなものを作りたいのかうまく説明ができずに苦労したこと、ラフイメージ物を作って持参すべきだったことが挙げられた。また、印刷会社に持ち込んだデータは様々な問題があり、何度も修正を求められた。印刷製本の実務知識はこうした失敗とともに身につけることになった。こうした学び過程は、全て教員の教訓ファイルにストックされて次年度には改善、解消が図られた。

2013年にはフリーペーパー企画ページ、童謡「夕焼け小焼け」のいわれがあるお寺の紹介リーフレットを制作した。この年度の学生からイラストレータを学ぶ授業を1年秋学期に設定したことで、ゼミ制作に弾みがついた。学生には課題として、企画書を書き、取材練習、ラフ制作物を作って交渉にいくことを課した。この工程を経たことで、当初予定していた取材先から断られた場合にもすぐに切り替えて、次の取材先に依頼ができた。グループ制作を終了したあと、個人の卒業研究で3名の学生が善光寺界限街歩きマップ、地域の歴史紹介冊子、市街地のリノベーションショップの紹介冊子を制

作した。個人作品制作過程では、グループ制作で学んだプロジェクトマネジメントの工程を一人で回すことができるか注目していたが、制作物デザインへのこだわりは強かった一方、計画的に制作を終えることには難があった。このことは、地域課題の把握が徹底されていなかったこと、制作物のクライアント設定がなく、誰のため、何のために情報発信するのが学生たちの中で曖昧だったからと思われる。原因はグループ制作の際に、商店街の話を書くなどの地域課題を理解する活動を組み込まなかったことにある。この点を除けば制作物のデザイン性・質が高くなったことは個人的こだわりや努力の結果だった。

2014年もフリーペーパー企画と飯山スイーツマップ制作を行った。ゼミ生が10名だったのでチームに分けて、飯山では観光プラン提案チームとマップ制作チームで別々の活動を行った。前年度の反省を踏まえ、チームごと作業工程表を作成させ期限をきって作業を進めることを意識付けるべく、授業の始めには「今日は何をする日か、工程表をみて話し合ってから作業を開始してください」を伝えた。取材・記事書き、編集作業はほぼ学生だけで行えたが、観光プランチームの首都圏大学生へのアンケート用紙づくりは一緒に考え、かなり手を加えることが必要だった。観光プランチームは、ビジネスコースの「ビジネス思考法」を全員が、「マーケティング基礎演習」も数名が受講していたため、地域のSWOT分析、STP分析をふまえた観光プランを提案することができた。最後の個人研究では5人がマップ、冊子等の制作に取り組んだ。いずれもコンセプト、情報発信の意図に地域の課題発見と解決を組み込むことができ、明快なプレゼンをしていた。期限も1人を除いて12月中旬の第一次提出ができたため、1月には他者評価アンケートを実施して制作物を改善させることができた。この経験から学生個人の力量差はあるものの、期限を意識して計画的にチーム作業を進めるよう意識付けることの効果を感じた。この3カ年の授業改善の過程を図式化して整理した。(図2)

図2 授業の改善過程（問題点の整理と改善策）



このような授業改善を経てゼミの目的が明確になった。今後は、その年の学生の状況を勘案してどれを重点項目にするか判断しながら、学生たちと目的共有するためのツールにできるだろう。

表2 授業目的及び学習要素

目的	獲得してほしい力	授業実践
地域課題の発見と情報発信による解決策を知る	冊子制作を通じて、企画意図を明確に文章化できる。コンセプトにまとめることができる。	前年度企画書を参考に地域課題の解決策をコンセプトにまとめる会議の徹底
情報発信プロセスをチームで責任分担して実行する	コミュニケーションによる合意形成、計画的協働、他者への配慮	作業工程表作成し役割分担と計画的行動を意識づける、打ち合わせの徹底
わかりやすさを意識した情報発信をする	文章の書き方、レイアウト、デザイン性を高める工夫をする	既存制作物を収集しデザインの比較検討、完成作品を他者に評価してもらい批判を受けて改善して最終稿とする

2014年の地域取材活動では学生の学びを総合するため、①地域の課題を理解するために行政や商工会などからマクロな視点の話を聞くこと、②学生自身が作業工程を理解しプロジェクトを管理する意識を持つこと、を实践して3つの目的に沿った授業展開がほぼできたと考えている。

4 学生の視点からみた学び

アウトカム研究では授業・活動の媒介の質が成長を促進させ、あるいは減退させるものと仮定されているにもかかわらず、教育機能の調査分析が看過されてきたか、別の研究課題とされている。汎用的能力の向上と授業満足度はいったいどのような実践の、どのような教育機能によって生じてきたのか、その論理を明らかにすることが必要だと考え、学生の学びの内実を整理し考察を試みる。評価のための道具は主に3つある。2012年は(A)「ゼミ振り返りシート」、学科全体で使用している(B)「清泉スピリット5つのカシート」(社会人基礎力の自己評価シート)に加え、パフォーマンス評価をする(C)「作品または論文の自己評価ルーブリック」シートである。2013年はそれらに加えてフォーカスインタビューを行い、(D) インタビューデータの分析を追加したことで学生の学びの視点が鮮明になってきた。2014年も継続的に3種類のシート(改訂版)を活用しつつ個別インタビューを実施した。

(1) 振り返りシート(A)の記述からの考察

2012年～2014年までのゼミ生数は21名であるが、制作回数が異なるためグループ制作活動終了後の振り返りシートの記載内容を精査し、11枚を抽出して質問項目ごとに整理したものが表3である。振り返りシートの回収時期は、2012年が卒業研究終了後の1回のみ、2013年は2回のグループ制作終了後と卒業制作終了後の3回、2014年は1回のグループ制作後である。

表3 振り返りシートの自由記述

	身に付いた力	将来活用性	反省・感想	自分の学び	制作回数
2012	A 集中力、粘り強さ、責任感(仲間がいたからできた)	企画意図の明確化、問題発見する客観的目線(FP制作を経て)	ミーティング日程調整の困難	文章力向上(まとめ方、語彙表現)	1回
	B 自ら話しかける、要領を得た会話	見る人の立場になって考える事(客観性)	多様な意見をまとめることが困難	実態調査を元に課題発見、主張を考えること(卒論アンケート調査)	1回
	C 臨機応変に行動する	相手の立場になってみる	他人が見てくれて評価されたことのうれしさ	地域の人、ことを知ることができ視野が広がった	1回
	D 制作に関する技術向上	話をまとめる、みんなで合意する	話し合うだけでなく現場に行くことが重要(現場で考える)	知識・視野の広がり	1回
2013	E 計画する力	取材データを要約して書くこと	人に頼りがち、もっと積極的に動けばよかった	取材した方々の人生から刺激を受けた	3回
	F 全員の動きをみる	人にわかりやすく伝えること	お互いのモチベーションの差	徐々にレベルアップした情報発信ができた	3回
	G 読み手の立場に立った文章を書く	集団活動は自分の特徴を自覚できる	自分主導の仕事がなく全部サブに終わった	卒業制作は1人で考え、イメージを表現することにこだわられた(忍耐力)	3回
2014	H 正しい情報のため確認を怠らないことを実践できた	相手の話を聞くときの姿勢	想定外が多く予定変更がよく起こった(計画が甘い)	意見を書き出し客観的にみんなで調整すること	2回
	I ターゲットを意識したメッセージ作りと発表ができた(観光プラン)	取材に必要な段取りはどこでも役立つ	仲の良い人とのチームだったのでスムーズだった	自分の役割に徹することで貢献した。地元愛の強い人たちがいることを知れた	1回
	J 客観的な目線をもつ	期限を決めて行動すること	軌道に乗るまでに時間がかかった	良いパンフを作りたいと思い、色、デザインを工夫できた	1回
	K PCスキル向上	事前調査の重要性が理解できた	作業工程を考えられなかった	NPOの方と知り合い活動の熱意を知ることができた	2回

表3の自由記述を分類・カテゴリー化し整理したものが表4になる。前章で授業の改善と展開を述

べたが、表3の項目間と年度間の個数の差異はわずかなようであるが、教員のその時々重点項目に対して反応しているようで興味深い。学びの 카테고리をさらに整理すると、①知識・スキルの向上（わかりやすい表現、学校での他の授業の影響、制作に必要なスキル向上）、②他者関係効果（客観的であること、視野の広がり、社会的責任を意識）、③集団的秩序形成（集団活動から得たこと、計画的行動への意識）の大きく3つのカテゴリーが抽出できた。

表4 学生たちの学びのカテゴリー

カテゴリー	記述された事例	12年	13年	14年
客観的であること	相手の立場に立って考える、客観的目線、実態から課題発見	4	1	2
わかりやすい表現・伝え方	要領を得た会話、企画意図の明確化、読み手の立場で文章書く	3	4	3
視野の広がり	地域の人、ことを知ることができた、熱意を知った	2	1	2
集団活動から得たこと	全員の動きを見ることが、集団活動で自分の特徴自覚、多様な意見調整が困難、意見を書き出して調整した、現場を見て話し合うべき	4	5	3
計画的行動への意識	計画性が身に付いた、期限を決めて行動すること、想定外多かった	1	1	4
学校での他の授業の影響	ターゲットを意識したメッセージ作りと発表ができた	0	0	2
社会的責任を意識	正しい情報のため確認を怠らないこと	0	0	2
制作に必要なスキル向上	制作に関する技術向上	1	2	1

2012年度学生たちは、6名中4名が街コンイベントで商店街の課題を感じとり、若者に地元のお店を紹介する情報発信を行った。初めての地域取材は準備、指導が不十分だったため、要領を得た会話、何をしたいのか明確に伝えられない経験をしている。また、グループで街歩きをする時間外の調整がうまくいかないことも多かった。社会人ボランティアとの共同作業も経験し、多様なすれ違いを見てきたことから意見調整や相手の立場への配慮が気になったものと推測する。

2013年度学生たちは、5名中3名が2回のグループ制作と1回の個人制作、併せて3回制作活動を行った。制作物の質へのこだわりは強くデザイン性の高いモノを制作した。だが、地域課題への意識づけが薄く、自分たちだけの活動が長く続いたことにより「集団活動に関する」記述が多いのが特徴だ。地域取材の回数も多かったことから、伝え方、表現方法へのこだわりが強くなる傾向があった。

2014年度学生たちは、10名中4名がフリーペーパー企画制作、別の4名が飯山スイーツマップ制作、別の2名がNPO法人の団体パンフレット制作を1回ずつ行った。表3に取り出したのは、フリーペーパー制作の2名とNPOパンフ制作の2名である。特徴的なことは、「計画的行動への意識」に関する記述が他の年度に比べ増えている点だ。これは、授業改善策として「作業工程表」を必ず作成させ工程管理を学生に意識づけたことの反映ではないかと考える。この4人はビジネスコース2人、地域情報コース2人だが、4人とも1年次のホテルでのビジネスプラン提案、2年次でマーケティング基礎演習で「ファミレスビジネスプラン」の提案を行っている。クライアントに対する「社会的責任」記述は他授業の影響もあると推測する。

(2) インタビューデータ (D) からの考察

ここでは、2013年のF,Gへの個別インタビューと2014年のHへの個別インタビューを取り上げて、

学生たちは何を自分の学び、成長と考えているのか、エピソードから読み解いていく。インタビュー調査は2013、2014年に追加したもので、振り返りシートの記述だけでは汲み取れない事柄を理解するために実施した。注目したエピソードは、2013年は地域取材で出会った大人（商店主たち）との関わりの苦勞と喜びの感情を伴う語りである。2014年は地域取材では大きな葛藤はなく、大人社会のルールに沿って取材活動を完了でき満足だったが、学内のビジネスプラン提案の際のグループ活動で生じた葛藤に伴う苦勞と喜びを経験したとする語りである。

1) Fさんの場合(2013年度)

Fは個人研究の取材で10ヶ所の商店、カフェ店主への取材をこなし、中には「これで商売大丈夫なのか」と感じるような店の店主と話をしている。取材の意図を伝えてもすぐには了解してもらえないこともあり、複数回足を運んで短時間でも世間話を重ねて信頼関係を築こうとアプローチしたという。そうするうちに、創業の話や現在の商売のこと、現代的デザインの商品を扱っていることなど、外からではわからない話を聞かせてもらうことができ、大人社会に近づき受け入れられた感覚を得たと語っている。社会に自分から飛び込むことで不安は解消され、少しずつ人間関係が築かれていくという経験をしている。

2) Gさんの場合(2013年度)

Gは個人研究で地元の街道の歴史を若者に知ってもらおうと、現在の街道に残る痕跡に加え2ヶ所の商店を取材した。ウィンドウ越しの雑貨が気になり飛び込んでアポイントを取り、立ち話で商店の歴史を昭和初期から聞くことができ、街道沿いが昔は繁華街であったことを知った。もう一件は複数回取材に出かけたが、忙しい時間や店主の不在などの理由で思うようにはかどらなかった。お客様がいる間店の片隅でじっと待つことも多くあったという。気持ちが減入りそうになりながら、作品のコンセプトや内容が明確でなかったから協力依頼が要領よくできなかつたと語っている。大人社会に飛び込む時になんとなくは通用しないこと、要領を得た言語化が大切だという経験をしている。

3) Hさんの場合(2014年度)

Hはフリーペーパーの地域取材でリーダーとなって取材先のアポイント、メンバーの連絡調整役を果たした。取材で得たことを読み手にきちんと伝えられるよう文章を書く事に苦勞した。社会に公表されるから間違った情報を載せないように確認作業を入念に行う努力を重ねた。大人社会に飛び込むことに葛藤はあまりなく達成感が大きかった。一方、学内のビジネスプランにおける集団活動では、メンバー間の意思疎通と協力体制ができなかったことに悩み、中間発表会では自分1人で考えたプランをグループのものとして発表することになった。クライアントから酷評されて落ち込んでいたが、メンバーからの孤立感が自分の壁にあったと反省して関係を作り直す努力を行う。中間発表の批判を受けてグループ内からも、何もせずに悪かった、自分は何をしたらいいかと声が上がり、最終的にはグループの成果物が出来上がったので、「超うれしかった」という経験をしている。

以上3人のエピソードを取り上げたのは、複数回PBLを体験した学生たちの学びを語る観点に、「壁を超える」「違いを超えて理解していく」と命名できる共通のカテゴリーが浮かび上がったからだ。FとGの場合、それは「大人社会」との接点に生まれた葛藤であったが、Hの場合は「学生同士の人間関係」であり「自分の心の壁」であったといえる。どちらもある時点で相互に浸透し合うような活動

や何らかの変容が起こり、壁が崩壊する交流を経てプロジェクトは完了したのだと思われる。この浸透や変容の過程を説明するデータを得てはいないため、これ以上の考察は困難である。

仮説としていえることは、一つには、地域取材という活動の固有性として大人社会に接近することがある。この境界面は明らかに異なる文化（言語表現、ルール、常識）の接触機会であり、依頼する立場の学生には相手の文化に合わせる行動が生まれ、想定できない状況が時に葛藤を伴いつつも視野の拡大、自信を生み出す根源となっている。二つ目として、一見同質のような年齢集団の活動においても、すれ違いや意思疎通の大きな溝を生み出すことがあり、異なる文化状況を作り出すということだ。ある目的を期限付で達成しなければならない活動において、意識された壁はありつつも双方が形式的にも目的遂行をしなければならない。真に双方が変容し創造的な空間を作り出したのかどうかは、参加者たちの揺れ動く感情の語りや場面の観察を通してある程度トレースは可能であろう。分断された状態のまま相互不可侵で完了できるプロジェクトがありうるのか、プロジェクト活動自体に中間的空間（Gutierrez の第三空間とも近い）を創り出し、双方が参与できる新たな価値（目的）の生成はどうしたら可能なのか、越境の論理についての検討が残された課題である。

5 まとめにかえて

本論の目的は、プロジェクト型学習（複数の状況を横断することによる学習（越境的学習））を捉え、その変化・効果を問うための枠組みを求めて、評価の観点を学生の学び、成長感の振り返りと語りから抽出し仮説的に整理することである。

振り返りシートの考察からは、地域取材・編集作業という活動に伴う固有の学びと他者関係のゆらぎや発展を学びと捉える記述が混在していることがわかった。固有の学びとは、「制作に必要なスキルが向上」「わかりやすい表現にこだわる」「客観的・読み手目線の文章を書く」といったことである。他方、他者関係の困難、ゆらぎと発展では、「多様な意見の調整が困難」「集団活動で自分の特徴が見えた」「地域の人を知り視野が広がった」が代表的な記述である。「みんなの意見を書き出して調整する方法を実践した」「現場に出かけて考えることが必要」などといった改善策をみると、中間的空間の創出に言及しているともいえる。

振り返りシートから学生たちがどういうことを自分の学びと捉えているのか、ある程度理解することができた。また、教員側が重点的に繰り返し語ってきたことについては、相当程度学生が真面目に受け止めていることもわかった。

インタビュー調査は、自分を対象化して語ることでできる学生でなければデータ収集ができないことなどの限界を踏まえつつ、振り返りデータの補足として今後も継続していく必要はあるだろう。学生たちがどのような状況で何に葛藤を感じ、どう越えようと行動したのか、越境の過程をある程度捕捉することが可能だからだ。成長とは異質な他者世界との接触により促進されるものと考え最近接発達領域と越境的学習の説明枠組みは参照すべきである。

以上本論では、アウトカム研究が看過している教育活動の内実を学生の学び、成長感を追跡することから試みた。授業の改善を振り返ることから始めた5年間の授業研究は、学習理論のパラダイム変容の影響もあり、教育効果を学校教育の転移として語ることを超えて、地域や企業といった経済社会に身をおいて広がる自己をどう捉えるかを射程に入れることの必要性に到達した。だが、地域や産学官連携によるプロジェクト型学習が、これからの時代にふさわしい人材を育成するにあたってより有効な学習方法だともいえない。学校教育の固有性は「愚直に考える時間を与えること」「失敗を繰り返して修得する機会があること」「基礎的な知識・方法を教えてくれること」「相談する大人や友人関係

があること」などの点で、実社会の学習とは異なる特徴を持つものである。これらタイプの異なる学習機会を活用できる時代状況にあるからこそ、多様な学びの機会を組み合わせ社会全体で次世代の育成に協力する拡張的学習概念の実装化に努めなければならない。香川が整理しているように、学校教育と現場の学びのどちらかが優位とは言えず、どちらも閉じた側面があり、それを「学校教育と実社会との緊張」ある関係として、構築しうる学び環境づくりの必要性が最善の主張である。産学連携が学校教育のあり方だけを変えるのではなく、学校との関わりから企業が何かを変えていくような、両者の参与空間のあり方を模索していくべきであると考えている。

引用・参考文献

- Beach, K. (1999) Consequential Transitions: A Sociocultural Expedition Beyond Transfer in Education, *Review of Research in Education* 24, 101-139
- 長田尚子、村田信行 (2011) 「サービス・ラーニングを手がかりとした職業実践的プロジェクトの展開—学生によるリフレクションの深化に注目した活動のデザインと評価」『京都大学高等教育研究』第17号 39-49
- 葛城浩一(2010) 「アウトカム指標のあり方を考える」『大学論集』第41集 広島大学高等教育研究開発センター 439-454
- 香川秀太(2008) 「複数の文脈を横断する学習」への活動理論的アプローチ—学習転移論から文脈横断論への変移と差異— 『心理学評論』Vol.51, No.4 463-484
- 香川秀太 (2011) 「第6章「越境の時空間」としての学校教育—教室の外の社会にひらかれた学びへ」 茂呂雄二編『社会と文化の心理学—ヴィゴツキーに学ぶ』106-128 世界思想社
- 武田るい子、長田尚子、村田信行 (2012) 「卒業生の「キャリア形成と短大評価調査」に基づくFD研究の方向性—教育成果の読み取り方と授業改善のあり方—」『清泉女学院短期大学研究紀要』第30号 33-47
- 花田朋美、山岡義卓、白井篤 (2012) 「参加型の地域連携プロジェクトによる大学生の学習効果—社会人基礎力評価からの考察—」『東京家政学院大学紀要』第52号 159-169
- 本部かの子、井下桂子 (2012) 「英語によるひがし茶屋街の観光案内「おもてなし娘」の活動を通して学生が関わる地域貢献の在り方と学生の気づきと成長についての研究」『年報』(32) 107-109 金沢星陵大学総合研究所
- 山岡義卓 (2014) 「企業との連携によるプロジェクト型授業の運営および大学生の学習効果」『国際経営論集』No.47 183-194 神奈川大学

SUMMARY

This study explores how project based learning in school can be evaluated based on mixed methods of analyzing students' reflection reports and case studies in depth interview to students. There are two findings. Students recognized that skill and knowledge were improved and learned that communication was effective tool to pursue collaborative work. In interview they reported that the gap between member's opinions or values gave them some lessons to learn. Discussing idea of cross-boundary should be examined to analyze individual development or transition across contexts for a new type of education between school and work or community.